

発症前の経験を課題に取り入れたことで運動主体感が出現し意欲が向上した一症例

○永原 巧¹⁾ 井内 勲¹⁾

1) 岡崎共立病院

【はじめに】

Gallagher (2000) は「行為を引き起しているのは自分だ」という感覚を運動主体感としている。今回、左被殻出血により右片麻痺を呈し、運動主体感が損なわれている症例を担当した。発症前の馴染みある右上肢使用の経験を想起し、運動予測と自動介助での運動結果との比較、誤差修正する課題を行い、運動主体感が出現、意欲に変化を認めた為ここに報告する。

【症例紹介】

左被殻出血を発症した50歳代女性。口頭指示で右肘関節屈曲、前腕回内外、手指の横つまみができるが「動かしてる感じがしない」「ボワッと痺れてる」「何もできない」と記述、手を洗う事は左手のみと日常で右上肢を参加させる様子はなかった。位置覚は多関節になると左右の誤差を認め、不意に動かすとNRS8の疼痛が各関節に出現した。注意を向け動かすと疼痛はなく、運動覚認識は良好であった。メンタルローテーション課題は32回写真を提示すると6分42秒、8回左右を間違え、KVIQの運動感覚イメージでは「少し感じる」と答えた。

【病態仮説と訓練】

症例は注意や予測困難な動きにて右上肢に疼痛が出現する為、予測と運動の不一致による疼痛と考えられた。また、不動により感覚フィードバックが得られず、誤ったイメージ生成や位置覚の低下から運動主体感が損なわれ、右上肢を使用しない事が考えられた。従って運動主体感のモデル図 (Synofzik, 2008) を参考に右手でお茶を飲む、手を洗う等馴染みある発症前の経験を想起し、道具使用や両手動作の運動予測をさせ、右上肢を自動介助で動かした時の結果を比較し、誤差修正する課題を実施した。

【結果】

1週間後、運動単位動員に著明な変化は認めないがメンタルローテーション課題は4分48秒で全て正答、位置覚も全て正答、KVIQは「ある程度感じる」「自分で動かしている感じがある」「物が持てると楽しい」と変化した。2週間後、疼痛はNRS1~2、痺れは残存するが他者へ右手の動きを見せる、「料理は右手でできることがあるかな」という記述があった。

【考察】

今回、馴染みある経験からの文脈や思考を課題に取り入れ、運動予測と結果を比較することでイメージや知覚が改善し、運動主体感が出現した。また、動かしている実感を得た事が右手で何かしたいという意欲向上に繋がったと考えられた。

【倫理的配慮、説明と同意】

本症例に発表に関する趣旨を説明し、同意を得た。